

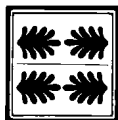
山岡莊八

徳川家康

6
燃える土の巻

講談社
文庫





講談社文庫

定価480円

とくがわいえやす

徳川家康 6 燃える土の巻

やまおか そうはち

山岡荘八

昭和49年2月15日第1刷発行

昭和58年1月31日第31刷発行

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策・菊地信義

製 版 豊国オフセット株式会社

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 株式会社国宝社

© Wakako Fujino 1974

Printed in Japan

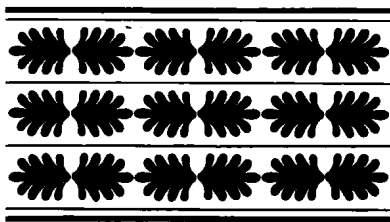
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えます。

ISBN4-06-131206-5 (3)

講談社文庫

徳川家康 6 燃える
土の巻

山岡荘八



講談社

目次

女刺客	七
火柱	三
二つの策謀	六
秋空	八
二男誕生	一〇
業火	一六
運命の使者	一五
落花の匂い	一七
秀吉の場合	一九
地の嘆き	二二
声なき声	二五
双つの鏡	二七
破れ雨	三〇

胆のありか

三三三

弥四郎の計算

三五八

小心小義

三七七

露見

三九六

妻の立場

四二三

裁く者

四三九

豊臣氏・大久保氏系譜

四五九

甲斐・信濃要図

四六〇

挿絵

木下二介

徳川家康

6 燃える土の巻

女刺客せつかく

一

あわてて調えさせた手土産を二人の小者にかつがせて、徳姫の侍女の喜乃は、岡崎を出てから三日目のくれ方に浜松の城下へ入っていた。

新居の渡しをわたるとき、さすがに胸が高鳴ったが、べつに怪しまれるはずはなかった。

築山御前の密命で、近く家康の子を生もうとしているお万の方を刺しにゆく……が表向きはどこまでも若殿信康の奥方、徳姫づきの侍女であり、徳姫から、お万の方へのお祝いの使者なのである。

もし、築山御前から……といったら、或いはいぶかしむ者もあつたであらうが、徳姫からと言われると、道中で自分を追い越していった本多作左衛門までが、馬を停めて、

「――時節柄ご念の入ったことよ」

むっつりした顔つきだったが、労をねぎらって通っていった。

(万一間違いのないように)

喜乃はすでに何十度となく胸にえがいた、お万の方との対決の手順を、改めて考え直した。

美しい松並木と白砂の浜辺をすぎて、新町へかかると行手の城にしずかな黄昏の色がにじみだしていた。

喜乃はその城にむかって伝馬丁をぬけながら、何度も息をつめてはつまずきそうになった。十八の小娘に、やはり「刺客」という荷は重すぎる。女だてらに少しばかり腕が立つなどと言われていい気になっていたのが悔まれた。

ただ年の若いせいで、やり損じた場合の不安だけはさしてなかった。

門の堅めはどこもかしこも嚴重をきわめていた。胴丸つけた足軽がいかめしく門扉の前に立っていて、戦場そのままの空気である。大手で一度番卒に道をたずねて、通用門へかかったのはそろそろ城内でかがり火がたかれた頃であった。

家康はいまこの城にはいない。

すでに七月十九日から長篠攻めにかかって、久間の中山に築いた付城の中にいる。したがって留守隊は駿河からの敵襲にそなえて寸分のすきもない構えであった。

「お願い申しまする」

通用門でも、喜乃が近づく前に、番卒が左右から二人ずつきびしい表情でとび出して来ていた。

「岡崎の若御台、徳姫さまからお万の方さまのもとへ通りとう存じまする」

「なに若御台から、何のご用で通られる？」

「お万の方さま、近々お産屋入りとうけたまわり、お祝いにまかり越ししました」

「してこなたの名は？」

「はい、腰元、喜乃と申しまする」

「しばらく待たっしゃい」

「独断は一切禁じられていると見えて、番卒の一人が中へ取次いだ。」

「宜しい。通らっしゃい」

「そう言ってから更に、」

「誰か案内をしてやれ。城の内部はすっかり変った。お女中にはわかるまい」

案内のあとから喜乃はホッとして門をくぐると同時にハッと足がすくんだ。

築山御前の密命どおり、うまくお万の方を刺したとして、この嚴重な見張りの中をどうして外へのがれ出ようか……？

はじめてその不安が十八の喜乃の心を大きく捕えていったのだ……

二

（これは大変なことになった）

その不安は、頑丈な城廓の間をまがりくねって奥の玄関にかかるまで、いよいよ喜乃の足許をあやうくした。

二人の小者にはむろん何も話してない。したがって彼等には何のおとがめもあるまいが、喜乃の立場はそのような単純なものではなかった。

一人の女を刺す……

しかもそれは城主家康の愛妾であり、家康の胤を宿している女性なのだ。

その女を刺し殺すということは、取りも直さず喜乃もまた生きてこの城は出られないということだった。

（いままで、どうしてそれに気がつかなかったのであらうか……？）

奥の玄関口へは、もう連絡があったと見えて五人の女中が並んで喜乃を待っていた。

「若御台からのお使者、遠路ご苦勞に存じまする」

そう言つて挨拶したのはまだ正式にはお部屋を与えられていなかったが、すでに家康の寵を受けている、奥取締りの西郷のお愛であった。

喜乃はそのお愛に、何と言葉を返したか覚えていなかった。

築山御前にはない、しつとりとした落着きと、全身にたゆとうもの柔かな女らしさが、若い喜乃を圧倒して、カーツと頭が熱くなった。

「お万の方は、ご不例にて、ずっと自室に閉じこもつて居りますれば、一応この愛にご使者の口上お聞かせ下され、取次お許し下さればありがたく存じまする」

身なりは質素だったが、まず喜乃を客間にとおして、しずかに相對した姿は、喜乃を抱きとるような優しさにみちている。

（これはお万の方よりずっと美しい！）

若い娘の癖で、ついところで比較しながら、喜乃は思わず舌がもつれた。

「わ……若御台のお言葉を、そのままお伝え申しまする」

「はい。謹しんで」

「若君さまには御血縁少く、淋しく存じて居りましたところ、お万の方さまには近々お産屋入り

と承り、家門の繁昌^{はんじやう}、ぜひ親しくお目にかかつて、およろこび申して参れ……と仰せられました」

「お言葉のまま、お万の方にお取次申上げまする」

燭台の灯影にくっきりと白い微笑を見せてお愛はていねいに頭を下げた。

喜乃はホツとした。

ここで若し病室へは案内出来ぬと断られたら、何と言おうかと考えるだけで混乱しそうな喜乃だったのだ。

女中が茶菓^{さか}をはこんで来た。そして入れちがいにお愛は、喜乃の差出した土産物の目録をたずさえてお万の方の部屋へ出ていった。

「お疲れでござりましょう」

年かさの女中は若い喜乃を労^{いたわ}るように、

「岡崎では、大御台様もすこやかにわたらせられまするか」

「は……はい」

「大御台さまもおよろこびでござりましょうな。お万の方さまは、ずっと大御台さまのお傍でお育ちなされたお方ゆえ」

「は……はい。それはもう……」

言いながら帯の間の懐剣に手をふれて、喜乃は思わず息をつめた。

三

お愛はしばらく戻らなかった。

すっかり外は夜になって、静けさの底からいよいよきびしい戦備のさまが感じとられた。

時々馬のいなく声が聞えたり、かがり火のはじける音に雑兵の談笑がまじっていたりした。おそらく城内のあらゆる場所に兵はくばつてあるのに違いない。

「お待ち致しました」

お愛が戻つて来たのは小半刻のあとであつた。気がつくとうしろに二人の女中が膳部をささげてしたがっている。

「お部屋さまには、ご使者のご到着を心からおよろこびなされ、むき苦しゅうはございますが、臥ふっている居間でお目にかかりたいと申します。つきましては、しばらくお髪をとく間、これにて食事をお召上りのほど」

喜乃はその時も何と答えたのかよく覚えていない。

問題はいいよ切迫して来たのである。

会うかどうかではなくなつて、会うことは決定的となり、会つてどう斃なすかにかかつて来た。喜乃は落着こうとあせつた。空腹で仕損じてはならないと思つたり、あまり食べすぎて身のこなしが鈍重になつてはと案じたりした。

幸い手足はそれほど疲れてはいなかつた。心の動揺さえしずめ得たらこの責任は果されよう。それにしても果したあとの問題はいいよ大きい。

逃れ得るとは考えられず、逃れ得ないと決定すればどうして死んでゆくかであつた。

むろんお万の方は悲鳴をあげて人を呼ぶに違いなく、最初にかかけつけるのは男たちではあるまい。

(とすれば、若しや私はこの人も……)

殺さなければならぬ運命にあるのではなからうかと思うと、自分の前に柔かく坐っているお愛を見るのがおそろしかった。

いやそれよりも喜乃が苦しんだのはお愛に案内されてお万の方の部屋へ通ってからであつた。

お万の部屋は、岡崎城の奥とは比較にならぬ質素さだつた。

いまだに今川義元の姪と、二言目には誇らかに言う築山御前の派手好みはとにかくとして、若御台徳姫にしても、今を時めく信長の一の姫ゆえ、当然と言えば当然であらうが、岡崎の二人の居間を御殿とすれば、これは作りも調度も女中部屋ほどのちがいがあつた。

その質素な部屋で寝ていたのであらう、夜具を片よせ、庄屋あたりの座敷で見かけそうな行燈のほかけを受けて、お万の方は使者の喜乃をひっそりと上座に迎えた。

ひどくやつれている。というよりも、何か異常に大きな腹のふくらみ方で、指でついても倒れそうなるろさに見える。

「若御台さまからのご使者を、このような部屋に迎えて、お許し下さりませ。して、姫さまにはおすこやかにて」

「はい。姫さまもほどなく産屋に入らせられますので、事のほかあなたさまのおん事を……」

言いながら喜乃は、そつと入口のお愛の様子をうかがつた。

お愛は一礼してつと立つた。灯りが暗すぎるので燭台をとりに行くと思へた。

(いまだ!)

と思ひながら、何故か喜乃は躰からだがすくみ手がしびれた。

殺そうとしている相手に、何の怨^{うら}みもないということに、ふたたびハツと戦慄^{せんりつ}したのだった。

四

お愛は燭台を自分でさげて来て二人の間においた。

室内が明るくなって、お万の方のやつれと歎^{なげ}びがいっそう切^きなく喜乃の眼に映っていた。

お万の方にはみじんも警戒心はみられなかった。大切な若君の奥方徳姫から、わざわざお祝いの使者が来たということで、晴がましい歎^{なげ}びと素朴な恐縮でいっぱいらしい。

一応の口上が済んで、喜乃が上座をさがろうとすると、

「どうぞそのまま」

こちらが相手の乳房の下をねらっているとも知らず、自分から手をあげて喜乃を制した。

「いいえそれはなりませぬ。そんな大それた……」

喜乃は立ってお万の方の手をひいた。

そして、自分の手の中に冷たくたぐり寄せられて来た細い相手の手首に気づくと、カーツと全身の血が燃えあがった。

（今だ！）

と感じ、刺したあとでは自分も死のうと突嗟^{とつさ}に覚悟が出来ていった。

（敵ではない！ 怨^{うら}みもない！ それなのに刺す自分……そのお詫^{わが}びに私も）

お万の方が立ちあがって、手をひかれるままによろよると喜乃の胸によろめきかかった一瞬だった。喜乃の懐剣はキラリと光った。

「あつ」

喜乃とお万の方が同時にさけんだ。

よろめき倒れるお万の方のうちかけの肩が二つに裂かれ、肩越しにのびた喜乃の手首を、お愛がつかんでいた。

お万の方はよろよろツと奥へのめった。

「ええ、離してッ！」

つかまったと知って喜乃は狂ったようにその手を振った。

事実、刺そうとした一瞬、お愛がどこにいたかも眼に入らなかった喜乃である。

入口にとろりと坐って、喜乃の胸さわぎなど遠く聞えない位置にいるそんな安心が、ものみごとに裏切られてしまったのだ。

「お騒ぎなさいまするな」

もがく喜乃の軀を抱くようにして、お愛は小さく耳許で叱りつけた。

「騒いではあなたのためになりませぬぞ」

そう言ってからびしりときびしい手刀が喜乃を打った。喜乃の手からポトリと短刀が畳におちると、お愛はそれを音たてて障子に蹴りつけた。

お万の方は、自分が何をされようとしたのか？ まだはつきり分らぬらしい。ポカンとした表情で、大きく肩を波打たせている。

「お部屋さまも、声をお発たてになりませぬよう」

まだ喜乃をおさえたままでお愛はいった。